



S F ・ 遺書屋

(二通目)

とてつもない依頼

湊 覚 (みなと かく)

●二通目・・・とてつもない依頼①

今日は、いや昨日？ いや今日だ。あれ、どっちかな？

夜中のバイト君が急に風邪で休みになってしまい、その分も続けて仕事したので眠～い。

それでも、無意識のうちにパソコンの前に座り込み、日課になっているメールを開いていた。

.....

earth@さん？

地球さん？

良く分からないが、メールが届いていた。

件名に

「お帰りないさい」

と書かれていた。一体、どんな人なのだろう？

開く前に受信した時間を見たら、俺が帰って来た時間だった。

メールを開いてみた。

「私は、彼方達が『地球』と呼んでいるものです。

貴方が『遺書屋』さんを真面目(まじめ)にやっているのです、私も『遺書』を書いてみたくなりました。

でも、私が死んだら、貴方が宇宙の彼方(かなた)にでも行っていない限り、私の『遺書』を読むことは出来ませんね。

こんな私のメールを信じて頂けますか？」

何を馬鹿なことを言っているんだ。

新しい新興宗教の勧誘なのか、これは？

信じる訳ないじゃないか！

『遺書』だって添付(てんぷ)されていないじゃないか！

・・・待てよ、こいつに返信メールを送ってやろう。

「何を信じると言うんですか？

新手(あらて)の詐欺(さぎ)ですか？

『遺書』だって、添付されていないじゃないですか！」

と、送ると同時に返信が来た。

「『遺書』を添付しました。

これで良いですか？

信じてもらえましたか？」

チャット<インターネット上の会話>になってしまった。

「どうして俺に『遺書』をメールするんだ！」

「貴方が『遺書屋』さんだからです」

「俺に、何をして欲しいんだ！」

「もちろん、私が死んだ時に、読んで欲しいためです」

「あんたが言うように、あんたが死んだら、誰も読めないじゃないですか！」

あんたは、何を言いたいんだ！」

「何故、この地球が滅(ほろ)んだかを知ってもらうためです。そして、他の星に移り住んだとしても、同じ過(あやま)ちを繰(く)り返して欲しくないからです」

「あんたが、地球だと言う証明が出来るのか！」

「たいがいのことは出来ます。

でも、死んでしまった貴方のお母さんを蘇(よみがえ)らすことは出来ません」

「分かった」

お願いしようと思ったのに、

「…それでは、元のスイッチが切ってある、この部屋の蛍光灯を点(つ)けてみて……」

パチパチパチ

と音がしたと思ったら、部屋の蛍光灯が点いた。

「それじゃ、テレビにも地域の地震計にも感じないが、俺だけに感じる地震を起こして……」

ドスン

あわてて、テレビを点けてみた。どこのチャンネルを回しても、今の地震を知らせるテロップは流れていなかった。

「まだ、何か、やってみますか？」

……………

「わ、分かった。もう、良いよ。

…信じよう。地球である彼方を。

でも、どうして？」

「それは…、

怖くなったのです。数十億年も生きているのに…。

今、貴方の住んでいる国、日本が『エコ』と言う運動を始めています。小さい子供から、お年寄りまでもが。

でも、もう遅いのです。このままでは、私は、私自身を支えきれなくなっているのです。

それで、私が消えて無くなってしまいう前に、『遺書』を残して置きたくなったのです」

「ば、馬鹿なことを言うな！

地球が無くなったら、俺達は、どうなるんだ！

地球を、いや、あなたを救う方法は無いのか！」

「ここまで、ボロボロになってしまうと、修復する方法は、

…私にも分かりません。

警告は、何度も出しています。季節変動、地殻変動、病気と…。

そのために、貴方達が呼んでいる太陽や月とも連携を取りながら…」

「太陽とも、月とも連携を取りながら？」

「そうです。地球が滅びると言うことは、太陽系全体にも影響するのです。だから太陽も月も必死なのです」

「そうなのか…。

今、世界が宇宙に基地を作ろうとしているようだが、それも関係しているんですか？」

「そうかも知れないですね。でも、私が消えてしまうと、太陽系のバランスが崩(くず)れてしまうので、どうになってしまうのか想像も出来ません」

「なんとか、あなたを救う方法はないのですか？」

あなたを救いたい！

もちろん、私のためでもあります。

それに、やっと、少しずつ変わろうとしている人達のためにも。

私に出来ることは、ないのでしょうか？」

「貴方は、正直(しょうじき)で、優しい人ですね。

そんな貴方だから、私もメールをしてしまいました」

.....

「私も、一日でも長く生きる方法を考えていました。

そして、それは、貴方の『遺書屋』さんのところに、一通も手紙やメールが来なくなる日を、貴方自身で見つけ出すことで、解決するかも知れないと思ったのです。

そうすれば、私も、貴方に『遺書』を残すこともないですから・・・」

「そうか、俺が、『遺書屋』を辞めれば良いんだ！」

「その時は、きっと、私の『遺書』が、もっと早く読まれる時だと思います」

「じゃあ、私は、どうすれば良いんですか！」

「さっきも言ったように、せっかく始めた『遺書屋』さんです。でも、『遺書屋』さんが必要でなくなる世の中になることだと思います。

『遺書屋』がなくなると言うことは・・・

『遺書』が必要であったとしても、それを託すのは『遺書屋』さんではなく、親であり、兄弟姉妹であり、身内がいなければ、友達ではないでしょうか。

そのためには、夫婦、親と子の絆(きづな)が強くなければなりません。絆が強くなれば、自然と心に余裕が生まれると思うのです。心に余裕さえ出来れば、そこに愛の芽が育ちます。それは、数十億年も生きて来て、目(ま)の当たりにしてきました。

親がいて、自分がいる。

その広がり、親子から地域になり、国になり、そして、そして、地球規模の愛が生まれれば・・・。

そうなれば、私の傷もいやされ、長生き出来るのではないのでしょうか？」

「そうなれば、私の『遺書』も、貴方が読むことはないでしょう。

その日が来るまで、私の『遺書』を預かっていてください」

「・・・ちゃんと、大切に預かっておきます。

もともと、『遺書屋』を始めたのも、話しを聴いてやれなかったことが始まりだもの。

俺にも親父やお袋がいた。

俺は孤児院で育ったが、一人で勝手に生まれてきた訳じゃない。ちゃんと、両親がいた。

・・・心に余裕がなければ『愛』の芽は育たない。

・・・その通りかも知れないな。

こんな今の俺に、心に余裕が生まれるだろうか？」

「貴方なら、きっと生まれますよ。

いいえ、もう、生まれています。まだ、赤ちゃんですけどね。

そんな貴方だから、『遺書』を送ったのかも知れません。

今日は、大変な一日でしたね。そろそろ、眠らないと、身体を壊してしまいますよ。

さあ、地球の、いいえ私の懐(ふところ)の中で、ゆっくり眠りなさい。

今は、続けるのです……

『遺書屋』さんを……

私の『遺書』を読まないためにも……

そして、今は、私の懐でゆっくりと眠りなさい……………」



●二通目・・・とてつもない依頼②

「どうしたの？ パソコンにかじりついちゃって…。

やだあ、よだれまでたらしてる！ 汚ったな～いっ。

ねえ、どうしたのよ？」

「え、ええ??????」

い、今、地球とメールしていたんだよ。

こ、ここにメールが??????

な、ない??????

ど、どうしたんだ??????」

「何をいつまでも、夢見ているのよ」

「ゆ、夢なんかじゃないいいいっ！」

「じゃあ、地球さんとのメールは？」

「ね、寝ぼけて、け、消してしまった??????」

……………

「おい、どうした？ あんまり連絡がないんで、二人とも餓死(がし)したのかと思って見に来たが、生きているようだな。

それじゃな」

……………

「な、なんなんだ、あの刑事は！」

「あれでも、心配してくれてるのよ、私達を」

「あ、あれでか？」

「そうよ、てれ屋なのよ、あの刑事さん」

「あ、あれ？ 何を話していたんだっけ？」

「さあ？ なんの話だったかしら？」

それより、ちゃんと布団を敷いて寝ないと、風邪を引くわよ」

「わ、分かったよ」

でも、なんの話しをしていたんだっけな？ まあ良いか。

疲れた一日だったな。

グーグーグー。

◇

あの人は、夢だと思ってくれたみたい。

私は、今でも信じられない。

あの人と地球とのメールのやり取りが…。

帰ってきた時に、元のスイッチが切れているのに蛍光灯が点いていた。壊れてしまったと思ったけど、メールを見て故障ではないと悟(さと)った。

……………

すべて、このUSBメモリ<取り外しが出来る小さな記憶装置>に、メールの内容を保存して

ある。

地球からの『遺書』も一緒に。

これは、封印(ふういん)しておきましょう。誰にも目の触れないところに。

.....

私も、心に余裕が持てるように生きなければ……。

今は、この人の隣で私も寝ましょう。

この人と一緒に、地球の懷に抱かれて.....